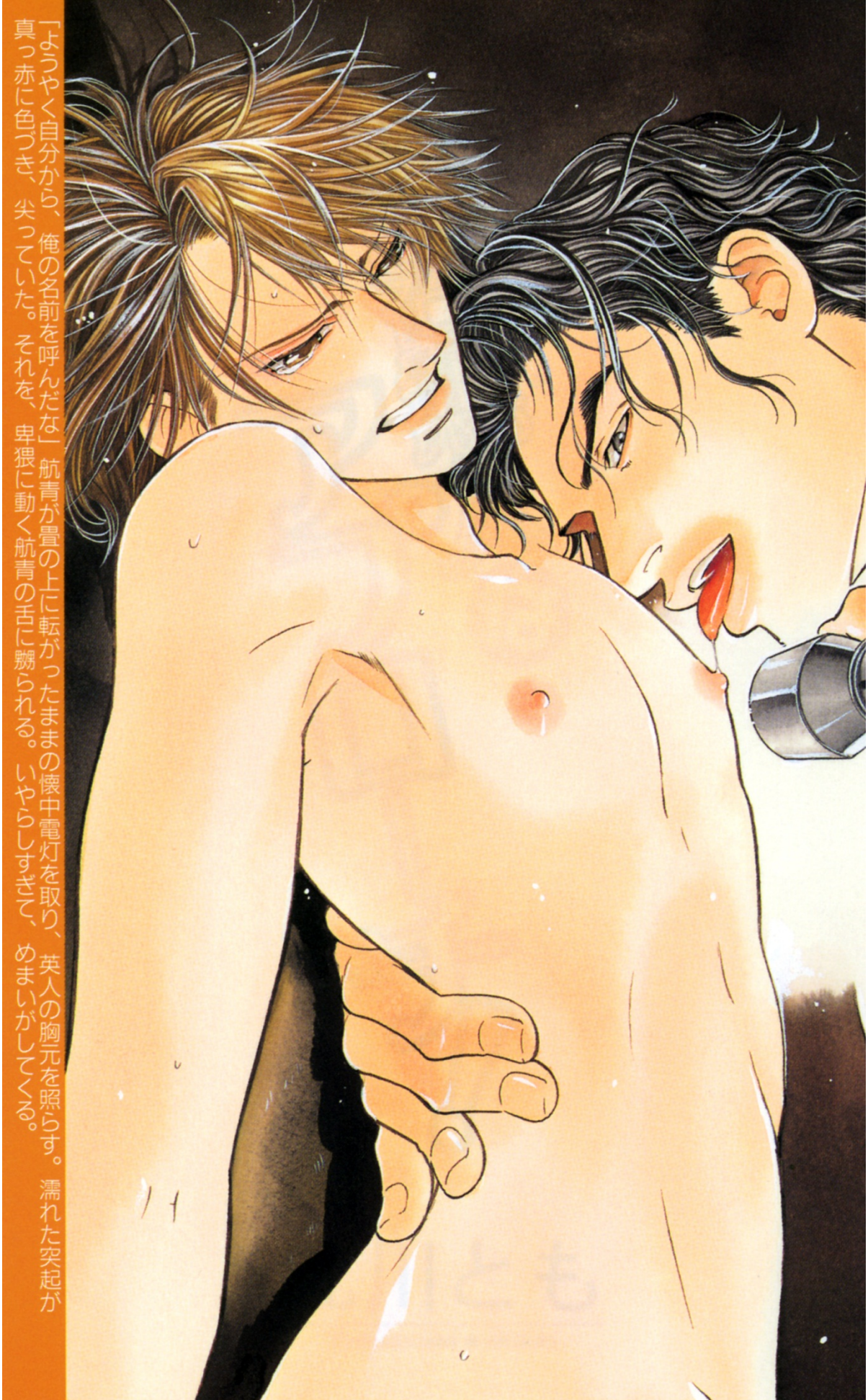
傍若無人なアプローチ!
北川とも
TOMO KITAGAWA ● PRESENTS
稲荷家房之介
FUSANOSUKE INARIYA ● ILLUSTRATION



「ようやく自分から、俺の名前を呼んだな」航青が畳の上に転がったままの懐中電灯を取り、英人の胸元を照らす。濡れた突起が真っ赤に色づき、尖っていた。それを、卑猥に動く航青の舌に嬲られる。いやらしすぎて、めまいがしてくる。

傍若無人なアプローチ

《立読み版》

北川　とも

イラスト　稲荷家　房之介

滝沢英人(たきざわひでと)はそっと眉をひそめ、顔を伏せ気味に周囲の気配を窺(うかが)う。だが次の瞬間、勢いよく顔を上げた。社員の何人かと目が合い、すかさず顔が背けられる。

不自然すぎる態度に、さきほどから英人を盗み見ていたのは明白だ。

「なんなんだ、この会社は――」

憮然として英人が呟くと、その声が聞こえたのか、社内を案内してくれていた社員が不思議そうな表情で振り返った。

「どうかしましたか？」

「あっ、いえ……。アメリカ帰りのメカニックが、そんなに珍しいのかと思って……」

英人は答えながら、もう一度周囲を見回す。業務管理部という部署が入っているフロアで、忙(いそが)しく社員たちは立ち働いているのだが、それでもときおり、ちらちらと英人を見ている。

このフロアだけではない。会社のビル内を上から下まで案内してもらったが、どこでも英人に対する反応は同じだ。

全員に共通しているのは、抑えきれない好奇心が顔中に満ちているということだ。少なくとも悪意を向けられているわけでないらしいのは救いだが、珍獣のように観察されるのは、正直気分がいいもので

はない。

最初は自分の格好が奇妙なのだろうかと思ったが、奇妙も何も、今日は地味な紺色のスーツ姿だ。ただし、自分がスーツの似合わない男だという自覚はある。それでも、他人から好奇心剥き出し(むだ)で観察されるほどではない。

スーツが似合わない云々(うんぬん)を抜きにしても、英人は自分が、特に目立つ外見をしているとも思っていない。

日本人男性の平均をやや上回る身長は決して長身とはいえないし、体つきも、アメリカにいた頃は細いと言われ続けて不本意だったが、中肉だ。

顔立ちにしたって——英人は無意識に自分の顔に指先を這(は)わせる。客観的に見ても普通だ。いや、ハンサムな部類に入るのかもしれない。愛想はないが顔立ちだけは整っていると、褒めているのかけなしているのかわからないような言葉を、子供の頃から言われ続けている。

それでも、絶世の美男子だと自惚(うぬぼ)れられるような容貌ではなく、ごくごく平凡な人生を送れるのを暗示するような程度のものだ。

そのはずだと、二十八年間、信じて生きてきた。
嫌なことを思い出し、つい英人は苦々しく顔をしかめる。
そんな英人を、案内役の社員が温和な笑みを浮かべつつも、意味ありげに頭の先から足の爪先まで眺める。そして出た言葉はこれだった。
「――そのうち慣れますよ。うちはのんびりとしたいい会社で、人間関係も良好ですから。滝沢さんが肩身の狭(せま)い思いをすることは、絶対ありません」
答えになっているようで、実は答えになっていない。英人は思いきり首を傾げる。
さらに突っ込んで尋ねようとしたとき、窓際に立っていた社員が先に声を発した。
「ああ、社長が戻られましたよ」
思わず英人も窓に歩み寄る。夏の終わりを示すような爽やかな風が吹き込んできて、髪を乱していく。
手で髪を押さえながら英人は窓枠に手をかけ、ビルの裏手にある駐車場を見下ろす。社員の言葉通り、『篠崎(しのざき)エアサービス』の社長、篠崎の姿があった。出先から戻ってきたのか、ちょうど車から降りているところだ。

切れ者、やり手、という言葉を具現化したような男だと英人は思う。三日前、日本での就職先を求めて、アメリカにいたときの知人の紹介でこの会社を訪れたとき、面接を担当したのが、社長である篠崎だった。おそらく年齢は三十代後半。

長身でバランスの取れたがっしりとした体躯（たいく）をスーツで包み、長い足で颯爽（さっそう）と歩いてビルの通用口に向かおうとしている。このとき、英人たちが向ける視線に気づいたのか、何気なくといった様子でこちらを見上げてきた。

鋭いわけではないのだが、やけに力のある眼差しを向けられ、英人はドキリとする。面接のときも思ったのだが、篠崎の眼差しには、心の奥底まで見透かされそうな怖さがある。それでいて、全身に自信が漲（みなぎ）ってはいるが、鼻につく傲慢（ごうまん）さにはなっていない。不思議な魅力を漂わせていた。

「――来たか」

英人を見上げていた篠崎が片手を上げ、そう声をかけてくる。腹の底まで響くような、低音で、いい声だ。

英人は遠慮がちに会釈する。すると篠崎が唇に薄い笑みを浮かべた。

百数十人の社員を抱える会社の社長らしく、笑みにまで凄みのようなものが漂う。反面、雰囲気や声だけでなく、この笑みにも魅力がある。

篠崎の厚みのある大きな唇は、目鼻立ちによっては不格好と映ったかもしれないが、浅黒い顔には、彫刻のモデルにでもしたいほどの完璧さで収まっている。日本人離れした深い眼窩（がんか）や高い鼻といい、顔のパーツの一つ一つが印象的だ。

一言で表すなら、国籍不明の美丈夫（びじょうふ）といったところか。

さきほどから、社員たちから向けられている視線以上に、篠崎の視線に居心地の悪さを感じ、英人は窓際から離れようとした。

「おいっ、滝沢っ。今から降りてこい。昼メシ食いに行くぞっ」

「えっ……」

外から篠崎に大きな声をかけられ、英人は慌てて窓から身を乗り出す。篠崎に指先で、こっちにこいと示される。

「行っておいで、滝沢くん。社内の案内は、だいたいこんなものだから」

英人の何をそんなに気遣っているのか知らないが、案内役の社員からこれ以上なく優しい言葉をかけられる。

社員たちの好奇心剥き出しの視線が再び自分に向けられているのを感じ、必然的に英人の返事は一つしかなくなっていた。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

傍若無人なアプローチ

《立読み版》

発行日　２０１２年３月１６日
著者名　北川　とも
イラスト　稲荷家　房之介
発行所　【ＭＩＬＫ－ＣＲＯＷＮ（ミルククラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Tomo Kitagawa 2012

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。